

声と暴力、そして個人

— “Billy Budd, Sailor” における言語障害について —

板垣真任

はじめに

Herman Melvilleの信奉者、詩人Charles Olsonは1947年の著書*Call Me Ishmael*においてMelvilleの遺作“Billy Budd, Sailor”¹（以下“BB”）について次のように言っている。(Billy’s) stutter is the plot. … It all finally has to do with the throat, SPEECH. (Olson 104) Olsonによれば、“BB”というテキストの核心は何より水夫ビリー・バッドの言語行為にある。そうとは言えど、われわれはどのように、どのくらいビリーの声に耳を寄せてきたのだろうか。研究史をビリーの声という観点から辿ってみたい。

E. L. Grant Watsonは1933年の論文で“God bless you, Captain Vere!” (123)というビリーの声、the triumphant seal of his acceptance (Watson 15)であると捉えた。この声は自らを死罪に追いやったヴィア船長へのビリーの最期の言葉である。遺稿がMelvilleの没後の1924年に初めて編集されて出版されたことを踏まえると、“BB”の研究は、ビリーの最期の声の分析から展開し始めたと言えよう。

やがてWatsonのような見方に異を唱える批評が出てきた。たとえばJoseph Schiffmanは1950年にビリーの最期の言葉を文字通り受け取らずにThe injustice of Billy’s hanging is heightened by his ironic blessing of the ironic Vere. (Schiffman 133)と言っている。“BB”研究の初期の論点とは、ビリーの死をMelvilleの運命の「受諾」ととるか、Melvilleの「皮肉」の表現ととるかという問題だったのである。ビリーは“God bless you, Captain Vere!”以外にも様々な声を発しているのだが、こうした初期の研究において顧みられることはなかった。“BB”研究はビリーの最期の声

を梃子にして始まったのにもかかわらず、実はその他のビリーの言語行為を分析の俎上に上げてこなかったのである。

“BB”を研究するにあたっては、〈受諾派〉か〈皮肉派〉のどちらかの立場を取らざるを得ないという見方が定着した頃、脱構築批評の最も初期の、最も卓越した論文として1979年にBarbara Johnsonの“Melville’s Fist”が発表された。Johnsonは、テキストの外部で起こっていたかのように見えた〈受諾〉と〈皮肉〉の対立が、実はテキストの内部でビリーとクラガートの対立として起こっていると論じた。Johnsonによれば、双方の読み方が崩れる瞬間はクラガート撲殺の瞬間であり、その出来事は吃音というビリーの言語障害が引き金となる。Johnsonはそれまでの批評とは異なり、テキストにおいて注目すべき場面をビリーの最期ではなくクラガートの最期に捉え直し、さらにビリーの吃音に目を向けた。ビリーのa linguistic defect (Johnson 87) がテキストの言語を読むにあたり決定的に重要なのだということに“BB”の読者は気付かされたのである。しかし、Johnsonの議論においてビリーの言語活動における細かなレトリック分析や吃音という症状の描写そのものに関する考察はない。Olsonの言葉を思い出すならば、Johnsonはビリーの「咽喉」the throatの苦難については無関心だったのである。

Johnsonの批評以降、“BB”を法や裁きにおける暴力性について考察するテキストとして読む傾向はますます強くなった。その一方で、裁きを司るヴィアから離れクラガートを分析の中心とする研究や、ビリーの言語障害を改めて考察する研究が、今日では新たな“BB”研究の成果として参照されている。後者の例として、2009年に編まれた*Herman Melville: Critical Assessments*にはDorsey Kleitzの“Stuttering and Billy Budd”が収録された。この論の特徴は、吃音という症状をビリーだけではなくヴィアやMelville、そして“BB”のオペラ版を作曲したBenjamin Brittenからも見出す点である。Kleitzの論文の結尾の小見出しはLiterary Stutteringであり、彼はliterary stuttering is the hole at the center of the text; it is another name for ambiguity, complexity, and multiplicity, … (Kleitz 397)と言っている。Kleitzは文学作品の「曖昧さ」といった要素を「吃音」という言葉で表現しており、これは従来の研究には見られなかった観点で

ある。つまり Kleitz は「吃音」を単なる言語障害の症状ではなく種々の文学的要素をあらわすメタファーとして捉えているのだ。

今日の研究において吃音は一個人の言語障害という認識をもはや超えている。そのとき、見落されるのはその個人の身体、そしてその身体が声を発するさいのメカニズム、および困難である。そこで本稿は吃音をもう一度症状として捉え直すことから始めたい。ビリーという個人の症状を診断する、ビリーの throat を診察する、という愚直な読み方は、実は徹底的に行われてこなかったからである。本稿ではそういう読み方をあえて選択することによって露わになる問題、覆われる問題を探っていきたい。

1. ビリーを診断する

ビリーは *Rights-of-Man* 号の仲間の船員たちから a sweet and pleasant fellow (47) と評されていた。しかし彼にも「ひとつの瑕疵」one thing amiss (53) がある。それは a vocal defect (53) である。ビリーの「声の障害」について、Melville は以下のように書いている。

Though in the hour of elemental uproar or peril he was everything that a sailor should be, yet under sudden provocation of strong heart-feeling, his voice otherwise singularly musical, as if expressive of the harmony within, was apt to develop an organic hesitancy, in fact, more or less of a stutter or even worse. (53)

この引用からはビリーの声について三つの情報が得られる。まず、「決められた時間に発する叫び声、掛け声」は職務上の発声であり、ビリーはこれを滞りなく行える。次に、ビリーの声質は「すばらしく音楽的」である。最後に、そのような声を出せるビリーも、発声するときに「身体器官の躊躇」を伴うことがあり、その現象は a stutter であると語られている。

ビリーが抱える stutter とはいったい何か。 *Oxford English Dictionary* では to speak with continued involuntary repetition of sounds or syllables, owing to excitement, fear, or constitutional nervous defect と説明されている

る。「吃音」という言語障害を特徴付けるのは、「意図しない音（節）の反復」であり、これは人間の身体にかかわることである。単語は複数の音素から成り立つが、吃音者の声帯の筋肉が語頭や語中の音素を「思わず」繰り返してしまい、吃音者は一つの単語をスムーズに言えないのである。そして、そうした現象が起こる原因は「興奮、恐れ、生まれつきの神経の障害」と書かれているが、これは人間の精神にかかわることである。ゆえにOEDの説明は、今日われわれが吃音を精神障害としても捉えていることを示しているのである。

一方、Melvilleもビリーの吃音がsudden provocation of strong heart-feeling (53) を原因として起こると書いているのだが、「吃音」は“BB”が執筆された19世紀末までには既に「心」の問題にもなっていたのだろうか。そうだとすれば、ビリーの言動を診察するように読むことで、彼が「心」に抱えた問題を炙り出すことができるかもしれない。

ビリーの吃音を診察するにあたり、事前情報として手がかりになるのは、吃音がan occasional liability (53) だということである。ビリーの症状は、「時折起こる傾向がある」のだ。またDorsey Kleitzはビリーの症状をBilly's stuttering insinuates itself into the text… (Kleitz 391) と表現する。insinuateとは一般的には「遠まわしに言う」といった意味があるが、もとは「徐々に染み込んでいく」という意味合いを持った言葉である。Kleitzはビリーの吃音が徐々に露わになり、テキストに浸透していく様相を言っている。ではその過程を診ていきたい。

第1章でビリーは商船Rights-of-Man号から軍艦Bellipotent号に徴兵される。そのときに商船へ向けた別れの挨拶“And good-bye to you too, Rights-of-man!” (49) が、テキストにおいて最初にビリーが発する声である。ここではビリーの言葉自体に吃音の症候は見られないし、地の文においてもこの言葉がどのように声に出されたかを描写する箇所はない。吃音というビリーの症状はまだ少しもテキストに「染み込んで」いないのである。ビリーはこの挨拶のために上官から遠回しな表現で叱られるが意に留めていない。なぜならビリーにとってinsinuations of any sorts (49) とはquite foreign (49) だからである。insinuationとは「ほのめかし」という意味でここに用いられているが、もちろん「浸透」という意味も

ある。これから軍艦という環境において「浸透」する吃音という症状は、ビリーにとってまだ「まったくの無関係」であったのだ。

第2章でビリーは出生について大佐から尋ねられる。しかしそれに対するビリーの答えは“*I don't know.*” (51) という三語だけである。そこで大佐は「君はどこで生まれたのか分からないのか、君の父は誰だ？」(51) と重ねて問い詰めるが、ビリーはやはり“*God knows, sir.*” (51) という三語しか発声しない。ビリーは大佐の質問に十全に答えられていない。ビリーは軍艦に移って早くも会話の不全を起こしているのである。

大佐は「これら簡潔極まりない答えに面喰って」(51)、さらに問い詰める。大佐が「君は自分の出生について何も分からないのか？」(51)と問うと、ビリーは初めて意味のあることを声に出す。“*No, Sir. But I have heard that I was found in a pretty silklined basket hanging one morning from the knocker of a good man's door in Bristol.*” (51) ビリーは「みなしご」(51) だった。この受け答えから見る限り、ビリーは自分が誰であるか、どのような出自の人間であるかを発声できている。しかしその発声の準備として、短い三語の繰り返しが二度も必要だったのだ。ビリーの言語障害は、テキストに「染み込み」始めたのである。

第9章でようやくストーリーは動き始める。ビリーと老水夫ダンスカーの会話の中で、部下ビリーと上司クラガートという人間関係がテキストに前景化されるのである。ビリーは自分の船舶道具の管理の仕方等についてクラガートの部下の一人から a vague threat (69) を受ける。この「脅し」に困惑したビリーはダンスカーに相談するが、ダンスカーはビリーに対し“*Baby Budd, Jemmy Legs is down on you.*” (71) と答えた。ダンスカーは、クラガート (ジミー・レッグズ) がビリーに悪い評価を抱いていることを伝えたのである。その言葉に対してビリーは以下のような言動をとる。“*Jemmy Legs!*” ejaculated Billy, his welkin eyes expanding. (71) ビリーが口にしたのは Jemmy Legs という二語だけであり、ビリーはそれを「突発的に叫んで」いる。さらにそのとき彼の「天の眼」は、「広がった」のである。第1章と第2章とは異なり、ビリーの肉体的な反応が現れ始めている。

精神医学のディスコースを用いてこの場面におけるビリーを診察して

みたい。DSM（『精神障害の統計と診断マニュアル』）には吃音が Child-Onset Fluency Disorder (DSM 36) として分類されており、どもる際に付随する症状として、motor movements (e.g., eye blinks, tics, tremors of lips or face, jerking of the head, breathing movements, fist clenching) (DSM 37) と記されている。ビリーは大きく見開いた目という motor movements を顔面に浮かばせており、そのような様子のビリーをダンスカーは Baby と呼ぶ。ビリーは第9章において、現代の精神医学のマニュアルにあてはまるような吃音の症候を示し始めるのである。

「ジミー・レッグズが！」という言葉につづいて、ビリーは “What for? Why he calls me the sweet and pleasant fellow, they tell me.” (70) と言って自分の驚きの理由を述べている。ビリーは「彼ら（他の船員）」から、クラガートは自分に良い評価を抱いていると伝えられていたのである。ビリーはこのとき初めて良い評価の自分 (the sweet and pleasant fellow) と悪い評価の自分に引き裂かれている。ビリーの自己評価が他者に破壊されたとき、吃音の症候がテキストにあらわれたと言えよう。

ビリーの吃音は第14章で頂点に至る。ビリーは夜中に one of the afterguard (82) に呼び出され、“You were impressed, weren’t you? Well, so was I.” (82) と囁きかけられる。「後甲板員」は impress に「徴兵する」² という意味を込めて言っているのだが、テキストの時代設定である18世紀後半、英国戦艦による強制的な徴用は英米両岸で横行していた³。そのような社会状況が織り込まれた impress という単語は第1章から既にテキストに用いられていたが、ここへきて軍艦の乗組員の声として impress という一語が口に出され、初めてそれがビリーの耳に届くのである。ビリーは「それ (impress) が何を意味するのかよく分からなかったので、何も言わなかった」(82) という態度をとる。彼はまだ後甲板員が声に出した impress という記号が意味するものが分からない、もしくは分かろうとしていないのである。

そういった態度のビリーに対して「後甲板員」はつづけて次のように言う。“We are not the only impressed ones, Billy. There’s a gang of us. — Couldn’t you — help — at a pinch?” (82) ここには三種のレトリックが織り込まれている。まず彼はビリーが理解できなかった impress を再度口にす

る。次に自分と相手の関係性を *gang* という言葉⁴であらわし、自分たちは一つの共同体であり、*impress*された者たちのグループの一員である、ということビリーに教えている。そして、*Couldn't you help at a pinch?* という依頼文に三回のポーズを挿れて発言する。この（文字上ではダッシュとして書かれた）休止は意図せぬ言語障害に因るのではない。むしろ切実さを表現するための、戦略的な言い淀みであると思われるが、その意図とは「徴用」されたという境遇を基に集結する共同体にビリーを勧誘することである。

後甲板員の言葉を聞いて、ビリーの態度は “*What do you mean?*” *demand*ed Billy, here thoroughly shaking off his drowse. (82) と変わってくる。「眠りを振り払った」という表現は、徴用された *gang* としての自我の目覚めを示している。ビリーは徴用されたという自分の境遇を共有する集団が船に存在することに気付いてしまったのである。

その様子を見て後甲板員は共同体への勧誘を続行する。彼は「二つの小さな物体」(82) をビリーの前にかざすのであるが、「物体」とは硬貨のことであり、後甲板員は共同体に組する際の報酬をビリーに提示したわけである。そして後甲板員は「これは君の物だ。もし君が——」(82) と言う。この「——」という発話の中止は先述の台詞と異なり話術の一部ではない。発話はビリーに中断されたのである。そしてビリーは以下のような様相を呈す。

But Billy broke in, and in his resentful eagerness to deliver himself his vocal infirmity somewhat intruded. (82)

ビリーは「苛立つほどの熱心さ」をここで抱えている。それは「彼自身を表現する」ことについての熱望である。自分は徴用に追従する従順な船員なのか、それとも *gang* の一員として自分たちの立場に異を唱える反抗的な船員なのか。ビリーはそれを目の前にいる男に向けて声に出し、言葉を「届け」たいのである。

しかし *vocal infirmity* がそれを邪魔している。この *infirmity* とは *mental or body weakness (OALD)* のことであり、ビリーにとって精神もしくは肉体の弱点とは、つまり吃音である。やはり、第9章と同様に自分の自己認識が揺すぶられるときにビリーは吃音を示すようだ。自分が吃音に陥っ

ている証拠として、ビリーは次のように後甲板員に向けて言っている。

“D-d-damme, I don't know what you are d-d-driving at, or what you mean, but you had better g-g-go where you belong!” (82)

ビリーは damme と driving と go という三語の語頭の子音を繰り返しており、これこそがまさに吃音の症状である。ビリーの吃音は「見えない欠点」No visible blemish (53) であると第2章には語られていた。第1章から第13章まではその表現の通りに、吃音というビリーの発声にまつわる何らかの blemish=defect の徴候は診られるのだが、吃音という症状自体を明確に見ることができなかった。しかし第14章において吃音という現象がインクの染みとして visible blemish になる。ビリーの吃音が紙に「染み込んだ」わけである。

2. キャビンの中で起こったこと

ビリーが後甲板員と会話する第14章以降、テキストにおいてビリーの声が直接話法で書かれる箇所は減少する。第15章においてビリーは後甲板員との出来事を軍艦の上層部に報告することをためらい、再びダンスカーに話しかける。ビリーが「出来事の一部」(85)を言うと、ダンスカーは「そう言っただろう、ベイビー・バッド」(85)と返答する。ビリーが“Say what?” (85) とつづけて問うと、ダンスカーは「ジミー・レッグズがお前を嫌っているということ」(85)と第9章で告げた言葉を繰り返すのである。これに対する“*And what, … has Jemmy Legs to do with that cracked afterguardsman?*” (85) という台詞を最後に、ビリーの声は第21章までテキストに引用符に挟まれた形では書かれないのである。

第21章はクラガートを撲殺したビリーが臨時裁判に出廷する場面である。容疑者ビリーは裁判において四度声を出す。まず証人ヴィアが喋った内容について“*Captain Vere tells the truth.*” (106) とビリーは言っている。この返答は「予想されたほどおぼつかなくはなかった」(105-106)と説明されている。次に「お前を信じている。我が部下よ」(106)とヴィアに言われたことでビリーは“*God will bless you for that, your honor!*” (106) と叫ぶ。この発声は「やや吃音まじりだった」(106)のだが、ビリーは self-control (106) で我を取り戻した。第21章では「吃音」とは既にビリー

自身で制御できる症状になっているようである。

そしてビリーは裁判において74語から成る6文を一度に言う。これはテキストにおけるビリーの台詞の中で最も長い。

“No, there was no malice between us. I never bore malice against the Master-at-arms. I am sorry that he is dead. I did not mean to kill him. Could I have used my tongue I would not have struck him. But he foully lied to my face and in presence of my Captain, and I had to say something, and I could only say it with a blow, God help me!” (106)

ビリーがこの供述の中で強調している事柄がある。ビリーは五つ目の文で「もし私が私の舌を使えていたのなら、私は彼を殴らなかった」と述べ、六つ目の文で「私は何かを言うべきであった、そして私はそれを拳でしか言えなかった」と述べている。ビリーは殺人を起こした理由を述べているように見えるのだが、言い損ねていることはないだろうか。たとえば言葉が出せなかったから拳を繰り出したのだという内容の文をビリーは二度も言っているが、言葉が出せなかった根本的な原因を口にしていない。そして、なぜ言葉の代わりとして拳が出たのかということも説明されていない。ビリーは殺人に至った自分に何が起こっていたのか、実際は理解できなかったのではないか。裁判は進行し、最後に何も言うことは何もないかと問われ、ビリーは“I have said all, sir.” (108) と言う。これが裁判におけるビリーの最後の言葉だ。法廷におけるビリーのスピーチの饒舌には、ある不可解さを禁じえない。ビリーには言い残したことがあるのではないか。

ビリーがクラガートを撲殺した第19章には、ビリーの声を引用符で囲んだ箇所は一個もない。大半の“BB” 批評はこの章をビリーの吃音の climax (Kleititz 391) だと捉えてきたのだが、第14章でわれわれが目にしたような、はっきりとした彼の吃音の症状をこの章で見ることができないのである。吃音がわれわれにとって visible な現象からふたたび invisible なものに変質するとき、テキストに起こっていることとは何か。そもそも、シカゴ大学版⁵テキストにおいて四頁しかないこの紙幅でビリーに起こっている出来事は、吃音と呼べるのだろうか。その点に慎重になりつつ、カラストロフまでを見ていきたい。

クラガートは第18章で船長ヴィアに対しビリーを告発する。それは強制徴用に不満を抱くビリーが反乱を企てているという内容である。そこで第19章においてヴィアはビリーからも事情を聴取しようと、ビリーとクラガートと一緒に、船長室に入るのである。三者が船長室に集まってから、ビリーの拳が炸裂するまでの経過は五つのパラグラフに分けられる。第一パラグラフでは、密室になった船長室内においてヴィアがクラガートに「私に言ったことを彼（ビリー）にも言え」（98）と命令を告げる様子が書かれている。第二パラグラフではその命令を受けたクラガートがビリーに「ゆっくりと近づき」（98）、「催眠的な視線」（98）で「告発を手短に述べた」（98）様子が書かれている。

クラガートの告発に対してビリーはどのように様子が変わっていくか、第三パラグラフの冒頭の三文には以下のように書かれている。

Not at first did Billy take it in. When he did, the rose-tan of his cheek looked struck as by white leprosy. He stood like one impaled and gagged. (98)

ビリーは始め、なぜ自分が召喚されたか、なぜそこに上司クラガートが居て、自分に言葉を発しているのかが分からなかった。しかしクラガートが自分に向けて喋っているのは *accusation* (98) なのだと「理解」*take in* したとき、まず彼の表情に変化が起こった。「バラのような頬」が「らい病」のように白くなっていったのである。顔面が白くなっていく現象は血行不良を示しており、思わぬ告発を受けたビリーは文字通りに血の気が引いていったのだ。

ここにおける *impaled* と *gagged* という単語もまた、ビリーの血流の流れを表現している。まず *impaled* は動詞 *impale* の形容詞形であり、*impale* には *to thrust a pointed stake through the body of, as a form of torture or capital punishment; to fix upon a stake thrust up through the body (OED)* という意味がある。「磔にされたような」ビリーの身体的な不自由は全身に行き渡っているのであり、彼の血の巡りは止まり、彼は腕も脚も満足に動かさない状況に置かれている。

体の血の流れが滞っているのならば、ビリーは空気を吸い、酸素を取り込まなければならない。しかしビリーは「柱に突き刺されている」と同

時に口には gag をはめられている。この gag とは something thrust into the mouth to keep it open and prevent speech or outcry. (OED) のことであり、何かを喋ろうとして口を開けたビリーはその瞬間に「口を開けたままにするための物体」を詰め込まれた感覚に陥ったのである。ゆえにビリーの体内で血の流れが止まっていくと同時に、呼吸器は空気を吸って吐くことが困難になっているのである。

このようなビリーの状況を言語障害という観点からも考えてみたい。吃音とは音素を組み合わせる言葉を作るという命令に体の筋肉が応答できずに、その音を反復する症状であるということは先に述べた。「猿轡」をはめられたような感覚に陥っているビリーは、空気を掴みとることすら困難な状況にあり、言葉を作る過程において、空気を吸い、声帯を震わし、意味の最小単位としての音に変換することも困難になっている。ビリーは音素を組み合わせる一組の単語にすることはおろか、音を出すという初歩的な段階で躓いているのである。これこそが第19章においてビリーの言語障害がわれわれの目に見えなくなった理由である。

ここまで impaled and gagged という状況に置かれてきたビリーに第四パラグラフで他者の声が聞こえてくる。それが船長の「話せ! 男よ!」(98) と「話せ! 自己弁護せよ!」(98) という命令である。命令に応じようとするビリーの様子は第四パラグラフの三文目において三つのセミコロンで分けられて描写される。一つ目のセミコロンまでは Which appeal caused but a strange dumb gesturing and gurgling in Billy; (98) と書かれている。ヴィアの「アピール」(二種の命令) はビリーに a strange dumb をもたらした。この感覚はビリーの観察者であるヴィアとクラガートのものだろうか。もしビリー本人の感覚だとすると、strange という単語に痛みが帯びてくるように思える。今ビリーが陥っているのは、吃音という言語障害の症状には必ずしもあてはまらない「初めての」言語的困難なのであり、それは dumb という「沈黙」「無音」という状況である。

その状況に対しビリーは gesturing を試みる。これは身体全体の動きであり、ビリーは言葉のかわりに体全体で何かを表現しようとした。しかし「喋らされている」ため成功しない。次にビリーは gurgling という行為に至る。この単語は擬音語であり、「ごぼごぼ」という音を示すか、もしくは

は「ごぼごぼという音を出す」という動詞としての用法がある。もし人間が gurgling の主語ならば、これは咽喉から口腔にかけての動きである。「猿轡」をはめられていてもビリーはなんとか音を自分の口から出そうとしている。しかし gurgling とは「ごぼごぼ」言うことにすぎず、意味の単位としての音を発する行為ではないのである。

ビリーは言葉を、せめて音を出そうと努力している。しかしそれはヴィアが要求している命令の内容の水準とはかけ離れている。「話せ」という命令は、音素を組み合わせて言葉を作り、言葉を並べて文にすることを要求しており、さらに「弁護せよ」という命令は、その文が自分を守るような説明になるように表現せよと高次元なことを求めている。そのレベルの違いから生じるビリーの絶望感は、彼に a condemned vestal priestess in the moment of being buried alive and in the first struggle against suffocation (99) を思わせる表情を浮かばせた。「磔にされて猿轡をはめられていた」ビリーは、その拳句に「生きながらにして埋められた」のである。suffocation とは「窒息(死)」のことである。空気の流れを塞がれることは、ヴィアの要求を満たすためのいかなる段階も果たせないことである。ビリーはもう何も話すことはできない。ビリーはここで、言語的に死んだのである。

3. ビリーの舌が震える時

キャビンの中のビリーの様子を読んでいくことで、ビリーが裁判で Could I have use my tongue… と仮定法で言っていた理由が明確になった。たしかにビリーは自分の声帯どころか、肉体全体を発声のために行使できなかったのである。しかし、その状況が拳の暴力に至る過程はまだ明らかではないように思える。ゆえにビリーがキャビンの中で理解できなかったことは二つある。一つは自分の身に何が起こっていたのかということであり、これは以上まで論じてきたように、a strange dumb という名付けられない言語的困難、そして「窒息」という語に集約される言語的な死である。もう一つはそのような自分に何が施されたかということである。この後者の出来事こそがビリーの拳を導いたという可能性がある。第19章においてビリーの拳が繰り出されるパラグラフを読むことによってこの問題を考

えていきたい。

窒息したビリーを目の当たりにしたヴィアは、「そのときまでビリーの言語障害の傾向にはまったく無知だったのだが、今や、即座にそれを理解した。」 Though at the time Captain Vere was quite ignorant of Billy's liability to vocal impediment, he now immediately divined it, … (99) ヴィアがビリーに起こっている障害を「理解」できたのは、ビリーの表情を見て以下のような記憶を思い起こしたからである。

he had once seen struck by much the same startling impotence in the act of eagerly rising in the class to be foremost in response to a testing question put to it by the master. (99)

「若い同級生」が「我先にと反応しようとすつくと立ち上がったとき」の「不能」 impotence がビリーと「同じ」だとヴィアは考えているのである。ヴィアは自らの記憶と目の前のビリーを照らし合わせ、ビリーが「言語障害」に陥っていると診断したのである。

ヴィアはその診断の妥当性を疑わずに、次にビリーの診療を実行する。まず、ヴィアはビリーに「近づき、やさしく肩に手を置いた。」 (99) そして「父のような」 (99) 声色で “There is no hurry, my boy. Take your time, take your time.” (99) と言うのである。この言葉、ヴィアなりのケアはビリーにとってどのように響いたのだろうか。Eve. K. Sedgwickは *Epistemology of the Closet* の“BB”論において以下のように言っている。

The sudden blow by which Billy murders Claggart in their confrontation under the eye of Vere is preceded by two interpellatory imperative addressed by Vere to Billy. The first of these instructs Billy, “Speak, man! …” The second of them, brought home to Billy's body by Vere's simultaneous physical touch, is “There is no hurry, my boy ….” It is possible that Billy could have succeeded in making himself intelligible as either “man” or “boy.” (Sedgwick 99)

Sedgwickはヴィアからビリーに下された二つの命令における、呼びかけ方に注目している。ヴィアはビリーを吃音と判断する前には彼を「男よ!」と呼び、早く喋ることを促していた。一方、吃音と判断した後には「坊や」

と呼び、ゆっくり喋ることを勧める。Sedgwickのinterpellatoryという言葉には、人は自分が何者かを示してくれる「呼びかけ」に応じることで主体が形成されていく、というアンダートーンが込められている。ヴィアの呼びかけはむしろビリーを「男」と「坊や」に引き裂いている。第1章から第14章のようにビリーの自己認識が揺らいだ瞬間にビリーのvocal impedimentがテキストに表現されるのではなく、第19章ではヴィアがビリーのvocal impedimentを見出した結果としてビリーの自己認識は引き裂かれるのである。

ここでヴィアは診るという行為を通して解釈するという行為の核心をわれわれに示しているようである。ビリーの自己が引き裂かれるときにテキストに言語障害が表現されるのではない。われわれが、ビリーは吃音ではないかと解釈した効果として、ビリーの自己認識がテキストで問題になるのである。つまり、〈吃音〉とは一個人の症状である以上に、ビリーの自己、自我、心、内面…といった問題にわれわれの関心を引き寄せるテキストの装置なのだと見えよう。

ヴィアはわれわれと同じように、ビリーの体に触れる（目に見えるテキストの文字を読む）ことで心にも触れようとする（目に見えないビリーの心理の謎を導き出す）。その処置こそがビリーの暴力を招いてはいないだろうか。ビリーが拳を繰り出すその瞬間までを見てみたい。

Going close up to the young sailor, and *laying a soothing hand on his shoulder*, he said, “There is no hurry, my boy. Take your time, take your time.” Contrary to the effect intended, these words so fatherly in tone, doubtless *touching Billy’s heart* to the quick, prompted yet more violent efforts at utterance… . (99 Italics mine)

ヴィアはビリーの肩に手を「置く」と同時に、優しい声をかけることによってビリーの「心」にも「触れる」。窒息したはずのビリーの肉体ではなく、ヴィアはビリーの「心」を通してvocal impedimentの治療をしようとしたのである。その判断はビリーに「暴力的なまでの発話の努力」を促すのだが、その努力はやはり実を結ばないと悟った時、彼は「心」の謎を、そこにたぎっている正体不明のエネルギーを、拳の「暴力」に変換し、

クラガートを殴り殺したのであった。この暴力の引き金はビリーのvocal impedimentではない。名付けえぬa strange dumbを追求しようとした末に引き起こされた、ヴィアの〈診る〉というもう一つの暴力なのである。

ビリーの「心に触れた」ヴィアと、ビリーの言動からビリーの心理を探りたい読者は、ともに近代における心理学化psychologizeの欲望に駆られた存在であると言えよう。遠藤不比人はこの言葉を「ほとんどすべてのことがらを人間の『心』の問題にしてしまう、そのような傾向、あるいは欲望」(遠藤 174) であると説明している。近代以降の社会において、「個人」individualという概念が発達するとともに、その「個人」には固有の内面や心理がある、という思考の枠組みが生まれた。そのカテゴリーに還元しながら様々の現象を検討したいという欲望は、近代から現代に至るまで人々に分ちがたく貼りついている。この欲望は近代小説とその読者にもけっして無縁ではないことは当然であり、遠藤の言葉を借りれば小説とは「個人の心理＝内面を描きながらそれ(心理)を作り出していった…近代文学では最強のジャンル」(遠藤 175) なのである。1891年という時代に「言語障害」を身体と精神の結節点として描いたMelvilleが心理学化の欲望とまったく無関係であると言うのは難しい。そうだとすれば寓意的に読まれてきた“BB”というテキストは、モダニティのテキストのように見えてくる。“BB”は、Melvilleの没後に隆盛した心理小説やリアリズムの小説の傾向をほんの僅かに示していたのではないか。

ゆえに“BB”はビリーの吃音を描きながらビリーの心理という問題をわれわれに投げかけるテキストと言えるだが、ビリーの心理の問題に踏み込むときに見落としてしまうことはないだろうか。遠藤は「近代以降、外的な社会とは切り離された『個人』の内面というような考えが広まり、そこに必然的に『心理』といった領域が作られることになった。…『心理』というカテゴリーは、…『社会』から『個人』を分離する歴史的な過程の中で作り出されたものである」(遠藤 174-175) と言っている。ヴィアに診療されたビリーの環境はどうだったであろう。第19章の舞台となるキャビンはそもそも closeted (97) という状況であったし、ヴィアは「父のような」声を出し、ビリーをboyと呼んでいた。Melvilleはキャビンを「社会」が這入り込まない私的な密室空間のように書いているのである。

そうだとすれば、ビリーの a convulsed tongue-tie (98) は、ビリーという一個人に特有の、心理という領域の問題に限られるのだろうか。convulsed とは動詞 convulse の形容詞形であり、OED にはその語源が以下のように説明されている。

Etymology: < Latin convuls- participial stem of convellere to pull violently hither and thither, to wrest, wrench, shatter, etc., < con- together + vellere to pluck, pull, tear

「あっちへ」「こっちへ」「暴力的に」「引っ張る、ねじる、粉々に割る」という convellere の意味は、まさにテキストにおいてわれわれが吃音を読むときの、ビリーの自己認識の揺すぶりと相似をなす。ビリーは良い評価と悪い評価の自分に引き裂かれ、gang に組みたい自分とそうではない自分に引き裂かれ、少年と一人前の男に引き裂かれていた。さらに vellere という語根は、(商船から)「引き抜かれ」、(軍艦で)「引き裂かれる」というビリーの半生をあらわしているようである。したがって convulse という記号は、たしかに、ビリーに個人的に起こってきたことが凝縮されたサインなのである。

しかし、convulse という単語はビリーの身体にだけ用いられるのではない。第5章というテキスト内の時代背景を説明する箇所において、以下のように用いられる。

Its abrogation would have crippled the indispensable fleet, one wholly under canvas, no steam power, its innumerable sails and thousands of cannon, everything in short, work by muscle alone; a fleet the more insatiate in demand for men, because then multiplying its ships of all grades against contingencies present and to come of the convulsed Continent. (59)

ここで convulsed は大文字の continent 「ヨーロッパ大陸」を修飾している。OED において convulse が to shake violently; to agitate or disturb physically (as in an earthquake), politically, or socially と定義される通り、「ヨーロッパ大陸」はナポレオンによる侵略戦争の予感を前にして、「社会的」に「震えている」のである。当時の軍艦は船員の肉体の「筋肉」によってのみ動かされており、英国にとって徴用を「廃止」すること(文頭の It

が指す内容とは impressment である) は軍艦を「不具にする」ことを意味した。そうだとすれば次のようなことが言えよう。強制的な徴用をつづけた結果、とある英国軍艦のとある船員、ビリー・バッドの声帯の「筋肉」は、彼の心の問題と結びついてしまった。そして、ビリー・バッドという肉体は「震え」た末に二度の死を遂げるのである(最初は言語的に、次に絞首刑によって)。ビリーの末路を辿ったあとに再びこの些末な箇所を読めば、軍艦の代わりにビリーが「不具者」になっていたということに気が付く。したがって徴兵を全ての始まりとするビリーの肉体の「震え」は、「ヨーロッパ大陸」の「震え」がさらなる遠因になっていたのである。convulse という単語は、ビリーという<個人>を彼が生きていた<社会>から分離し、心理学化する記号なのではなく、むしろ結びつけ、そこに存在していた徴用兵の労働や経済といった問題を想像させる記号なのである。

おわりに

ビリーの言語障害は、一個人の症状であると同時に二つの側面を持つ。一つはビリーの<心>の謎に迫ろうとする欲望を喚起するシンボルだという面である。精神医学のマニュアルなども参考しながらビリーの内面を思考しようとする行為、それはすべて吃音という症状に症状以上の意味を読み取りたい近代的欲望が下支えしている。一方で convulsed tongue-tie というビリーの言語障害を端的にあらわす言葉は、ビリーが生きていた<社会>を発見するための手がかりとなった。テキストの中で「震わされている」のはビリーだけではない。ビリーのような境遇の人間を大量に生み出した18世紀後半の英国が交戦している、「ヨーロッパ大陸」もまた「動乱」の予感を孕んでいたのである。

最後に Melville がその状況を *to come of the convulsed Continent*. (59 Italic mine) と書きあらわしたことに触れたい。Melville は「震える大陸」を「未来に起こる」状況として書いているのである。Melville にとって convulsed とは未だに起こっていない出来事であり、それは裏返せば未来へ向かっていく時間の中で何度も起こっていく可能性があるということでもある。この箇所に注目する限りにおいて、18世紀末に設定された時

代設定は解け、異様な時間感覚の中へテキストは投げ出される。未だ到来しない convulsed tongue-tie/Continent とは Freud の用語を使えば <回帰> する状況であり、そこには何らかの <抑圧> がある。そして Freud の卓見はその用語がけっして個人に限定されないという点にある。19 世紀末の Melville は、Freud が回帰と抑圧の問題で共同体を思考する数十年前に、convulsed という一語に個人と共同体の係わりを込めていたのだと言えよう。さらに Continent という記号がナポレオン戦争に先立つ 1776 年において既にアメリカ独立というディスコースの中で「アメリカ大陸」をも包含していたという事実⁶ を踏まえれば、ビリーの言語をめぐる <社会> の問題はアメリカという国家の問題に横滑りしていくのである。

注

-
- ¹ Melville, Herman. *Billy Budd, Sailor*. Edited by Harrison Hayford, and Merton M. Sealts, Jr, The U of Chicago P, 1962. なお、以後の *Billy Budd, Sailor* からの引用はすべてこの版を用い、頁数は本文引用箇所のために括弧に入れて示す。なお本文においてはテキストを未完成の中編として捉えているため表記を“Billy Budd, sailor”としている。
 - ² 動詞 impress について OED には To levy or furnish (a force) for military or naval service, to enlist; spec. to compel (men) to serve in the army or navy (in recent use, only the latter); to force authoritatively into service. という定義がある。「強制的に」という意味合いが強調されてある。
 - ³ 18 世紀末の状況について Melville の記述は以下の通り。It was the summer of 1797. In the April of that year had occurred the commotion at Spithead followed in May by a second and yet more serious outbreak in the fleet at the Nore. The latter is known, and without exaggeration in the epithet, as “the Great Mutiny.” (54) 「ノアとスピッドヘッドの反乱」は彼の創作ではなく史実であり、Melville はこの海兵反乱の史料から“BB”の構想を膨らませていった。
 - ⁴ この gang には「輩」という意味を超えて強制徴用のコノテーションを含む。なぜなら強兵徴用された者たちのことをそもそも press gang と呼ぶからである。Keith Mercer の説明によれば press gang とは the face of impressment: it consisted of a group of about ten seamen and marines, led by a commissioned officer, and was sent into communities armed for confrontation. (Mercer 202)
 - ⁵ 19 章は 97 頁の下部三行から 100 頁の半ばまで。さらに三者の対峙はたったの 4 パラグ

ラフだけで終わる。これに比すると、たとえばヴィアが開いた臨時法廷の22章は13頁の紙幅が費やされる。

- 6 アメリカ独立の心的原動力となった Thomas Paine の *Common Sense* に次のような箇所がある。I have never met with a man, either in England or America, who hath not confessed his opinion, that a separation between the countries, would take place one time or other: And there is no instance, in which we have shewn less judgment, than in endeavouring to describe, what we call, the ripeness or fitness of the Continent for independance. (Paine117) この Continent とは宗主国ではなく植民地アメリカに他ならない。下河辺はこの記述について「continent という記号とその記号とその指示対象の関係を覆し、それによって植民地の言語に新しい指示対象を滑り込ませる意図が、彼のテキストにこめられていた」(下河辺 40)と分析している。

Works Cited

- American Psychiatric Association. *Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders*. 5th ed., American Psychiatric Publishing, 2013.
- Johnson, Barbara “Melville’s *Fist: The Execution of Billy Budd*.” *The Critical Difference - Essays in the Contemporary Rhetoric of Reading*. The Johns Hopkins UP, 1980, pp.79-109.
- Kleitiz, Dorsey. “Stuttering and *Billy Budd*.” *Herman Melville: Critical Assessments*, edited by A. Robert Lee, Helm Information, 2000, pp.390-8.
- Melville, Herman. *Billy Budd, Sailor*. Edited by Harrison Hayford, and Merton M. Sealts, Jr, The U of Chicago P, 1962.
- Mercer, Keith. “Northern Exposure: Resistance to Naval Impressment in British North America, 1775-1815.” *The Canadian Historical Review*, vol.91, no.2, U of Toronto P, 2010, pp.199-232. *PROJECT MUSE*, doi:10.1353/can.O.0304.
- Olson, Charles. *Call Me Ishmael*. Reynal & Hitchcock, 1947.
- Oxford Advanced Learner’s Dictionary of Current English*. 5th ed., Oxford UP, 1995.
- The Oxford English Dictionary*. 1989 2nd ed., *OED Online*. Oxford UP, dictionary.oed.com/. Accessed 16 October 2016.
- Paine, Thomas. *Common Sense*. Edited by Isaac Kramnic, Penguin, 1986.
- Schiffman, Joseph. “Melville’s Final Stage, Irony: A Re-Examination of *Billy Budd* Criticism.” *American Literature*, vol.22, no.2, Duke UP, 1950, pp.128-36. *JSTOR*, www.jstor.org/stable/2921745.
- Sedgwick, Eve Kosofsky. *Epistemology of the Closet*. U of California P, 1990.
- Watson, E.L.grant. “Melville’s Testament of Acceptance.” *Twentieth Century Interpretations of Billy Budd*, edited by Howard P. Vincent, Prentice-Hall, 1971,

pp.11-16.

遠藤不比人「トラウマ」大貫隆史他編著『文化と社会を読む批評キーワード辞典』研究社, 2013, pp.174-82.

下河辺美知子『グローバリゼーションと惑星的想像力——恐怖と癒しの修辞学』みすず書房, 2015.